

びわこの 考湖学

31

琵琶湖の湖上交通は、秀吉によって組織された大津百艘船によって一つの到達点にいたりました。ただし、当時の琵琶湖上の船は、大津浦に集められた「百艘の船」だけではなく、およそ2000隻にもおよんだといえます。

では、他の船はどのように取り扱われていたのでしょうか。

秀吉以前とは異なり、「船奉行」が設けられ、管理されていたのでした。船奉行の役割は、船の管理、税金の徴収、御用役船の手配などでした。琵琶湖上での水運を统一的に掌握するという政治的側面もさることながら、年間7000枚におよぶ銀子が運上銀として秀吉にもたらされるといふ経済的側面も大いにあります。

天正年間(1573~1592年)に初代奉行となったのが、草津市芦浦町に現在も

所在する天台宗芦浦観音寺の詮舜でした。芦浦観音寺は戦国時代以来、坂本へ渡る志那の港をおさえていました。さらには、詮舜の兄である賢珍が秀吉の信任を得て蔵入地の代官を務めていたこともあり、船奉行となったのでした。

船奉行となった詮舜は、秀吉の「唐入り」(文禄・慶長の役)にあたっては、唐入奉行早川主馬頭らとともに加子(船乗り)の徴発を行いました。琵琶湖諸浦の加子35名を引き連れて、朝鮮に赴くべく出兵の基地となっていた肥前名護屋(現在の佐賀県唐津市鎮西町)へと向かっていました。

詮舜は慶長5(1600)年に没し、甥の朝賢が跡を継

船奉行芦浦観音寺

絶大な権威で水運統制

初代船奉行となった芦浦観音寺の詮舜(県立安土城考古博物館所蔵の「観音寺詮舜画像復元模写」より)



ぎ船奉行となりますが、相変わらず豊臣政権と強いつながりを持ちつづけます。同年の天下分け目の関が原の戦いにおいては、大津百艘船の面々とは異なり、敗れた西軍の味方をしたのでした。

しかし、西軍に与したにもかかわらず、朝賢は、大久保長安らによって従来通り船奉行に任じられました。ただ、彦根藩領の船は船奉行の

支配の手から離れ、権限は縮小していきました。さらに、貞享2(1685)年、朝賢から3代目の朝舜の時に事件が起こります。朝舜が代官を務めていた蔵入地の収納が滞っているとして、代官と船奉行の職務を免

じられてしまったのです。これは、徳川幕府が開かれて以来、地元との関係が濃厚であった代官にかえて、幕府

の官僚的な代官へと移行させる政策の中で執り行われたものでした。江戸時代を通じて、代官を世襲した事例はほとんどなく、本当に蔵入地の収納が滞ったのかはともかくとして、起こるべくして起こった出来事であったのです。

大津百町のひとつ、「観音寺」は、かつて船奉行観音寺の役宅があったことに由来します。今はその名を留めるのみで、湖上の舟を取り仕切っていたかつての隆盛をうかがうことはできません。

(滋賀県文化財保護協会 畑中英二)